

玉村小学校『草原』誌に描かれた子ども

—教師の記録した事実—

*吉 村 敏 之

Children in Tamamura elementary school described on the “Sogen”

YOSHIMURA Toshiyuki

要 約

群馬県佐波郡の玉村小学校では、1935（昭和10）年8月号から1943（昭和8）年1月号まで10号（不定期）の校内研究雑誌『草原』が刊行された。戦時体制下「錬成」が強調された風潮の中でも、玉村小学校の新任教師たちは、子どもの事実を深くとらえる目を育み、学習指導の力量を養った。子どもとの日々のかかわりを記録して省察することが、教師の成長を促した。『草原』誌の編集を担った斎藤喜博は、玉村小学校での実績（教科指導の充実、学習集団の組織、実践記録の蓄積、子どもが「見える」眼力の形成など）をふまえ、1952（昭和27）年度から11年間にわたり、島小学校長として「授業の創造」に取り組み続ける。実践の記録と省察を『島小研究報告』にまとめた。

Key words：実践記録・子ども研究・玉村小学校・『草原』・斎藤喜博

目次

- 1.はじめに
- 2.学級集団の組織—斎藤喜博
- 3.学習指導の充実—永井多知子
- 4.子どもへのいつくしみ—木島まさ
- 5.教育の理想と現実のはざま—山保男
- 6.日々の実践を見つめて—新任教師の成長
- 7.おわりに—島小学校の教育へ

1. はじめに

戦時下でも、子どものよさを発見して学ぶ力を伸ばす実践を積み重ねた教師が、確かに存在した。一つの実事が、群馬県佐波郡の玉村小学校〔玉村尋常高等小学校、1941（昭和16）年から玉村町国民学校となる〕において刊行された『草原』誌に示されている。子どもの姿が詳細に描かれ、教師の心の動きも記されてい

る。「錬成」が重んじられた時代に、子どもの見方、子どもとのかかわりをめぐり、教師による省察がみられる。『草原』誌上の子どもの記録は、今なお、日々の実践を拠り所として教職の専門性を高める際の指針となる。

若い教師たちが、子どもの事実を記録して自らの実践を振り返り、子どもへのまなごしを細やかなものにし、子どもとのかかわりの質を高める様子を、本稿で示す。

2. 学級集団の組織—斎藤喜博

玉村小学校の学習指導研究の中心的な担い手であった斎藤喜博は、子どもが「いじける」ことのないように配慮した。『草原』第5号・昭和16年1月号の「私の教育帖より（五）」において、「無理な叱責」が子どもにとって害毒であることを記している。

ある児童が泣きながら遅刻してきた。理由を聞くと、お勝手しながらあやまって茶碗をかいたら、お母さんが「かけた茶碗をもとどりにしてから学校へ行け」と言っ

* 附属教育臨床研究センター

で叱ったというのであった。

私はその時「お母さんはあなたの粗忽をなおそうとしてそう言ったのだ」と言っておいたが、こんな無理な無茶な叱り方が、いまだに子どもたちの家庭において平然として行われているのである。そして子どもをそこなっているのである。

我々は仕事に多忙なとき、また心の平静を失っているとき、どうかするとこういう無茶な無理な叱り方をしてしまうものである。大いに考えなければならないことである。

叱られ続けてきた子への指導の困難を経験した、斎藤は、「叱らないで育てる」教育を目指した。伸び伸びと育った子どもたちが互いに助け合う学級をつくろうとした。

叱らないで育てられた子どもは学校で教えよい。叱られないで育てられた子どもはすなおで純真で明るく積極的である。

私は叱られないで育ったために、少しぐらいわがままで、またあばれであっても、叱って育てた、ひねくれで、陰気で、どうにもほぐしようのない、冷やかな心の子よりもより、どれだけ指導しやすいかかわらないと思っている。

子どもは伸び伸びとたがいにいたわり助け合うように育てていきたいものである。そういう生活のできる子どもに子どもを訓練していきたいものである。

戦時下の1943(昭和18)年に出された『教室記』の「教室独語」¹⁾の中で、子どもを「叱る」ことについて記している。教師の子どもに対する姿勢を問題にしている。

子どもを叱ることはいけない。まして子どもがいじけるほど叱るなど教育者にあるまじき人格の所有者でなければいけないことである。けれども子どもをぜんぜん叱らないこともまたいけない。それは放任であることが多い。放心であることが多い。

さらに、「錬成」の名のもとに、子どもを叱責して苦しめる、当時の風潮を批判した。

国民学校教育の錬成は、いたずらに子どもを叱ることではない。子どもを苦しめることではない。子どもの肉体だけを過度に訓練することではないし、できない子ども、力の弱い子どもを一律に無理させることでもない。知識をしっかりと学ばせることも錬成であり、身体の弱い子どもをそれに即して保護し丈夫にしてやることも錬成であり、学年の層に応じて訓練することも錬成である。休養させることも睡眠を十分とらせることも、広い意味から

いえば錬成のうちにはいるのでなければならない。

教師たちの間に、教室での教科指導を疎かにして、校外での行事に走る傾向が著しくなった。子どもにのみ厳しい鍛錬を強いる軽薄な風潮を、斎藤は苦々しく思い、憂慮した。

近時教室内での錬成、学習および生活による子どもの錬成ということが等閑視され、錬成は教科学習外の特別な行事訓練によらなければならない、というように考える行きすぎがありはしないか。そしてそれは考えた結果ではなく、そうすることが流行であり、かつ安易であるがゆえにそうしているという傾きがありはしないか。

しかし、斎藤の考えは「自由主義」として非難される状況であった。²⁾ 1938(昭和13)年4月には、国家総動員法が公布された。文部省が「国体の本義」を配布し、学校教育への統制が強まった。7月、盧溝橋での軍事衝突が起きて、戦時体制へと入り込む。

斎藤は、このころ、「自己完成の教育」を実践しようと努めた。子ども自身の内に潜む力を引き出し、自分の力で伸びていけるように導こうとしたのである。

種にはそれ自体に発芽し成長していく力がある。それと同じに教育においても、子どもたちは自分を成長させ完成させていく力と意欲を持っている。教師とか学校とかは、そういう子どもの持っている力を、前面に押し出し、子どもたちが喜び勇んで自分を成長させ自分たちを一日一日と完成させていこうとして懸命に努力するように導くことである。そういうふうに導かれた子どもたちは、誰の命令がなくとも、誰の監督がなくとも、絶えず自発的に歓喜的に自分を向上させることに全力をつくすのだ。そういう内面的な教育の努力をしないうで、機械的、形式的な教育だけをしていると、子どもは自分で動くことをしなくなってしまうのだ。

斎藤は、校長から「自己完成というのは自分だけを大切に考える考え方」とであると批判され、「国家と個人はどちらが先になると考えるか」と問われた。斎藤は「個人があって国家はあるのだと考える。国家があって個人があるのではない。国家は個人のためにあるものであり、また、すぐれた個人があってはじめて国家もよくなるのだ。教育においても個人が先にたつのであり、全体が先にたつのではない。また、すぐれた個人ができて全体もよくなるのだし、その結果として全体からのよい影響を受けて個人もさらによくなるのだ」と答えた。

1) 斎藤喜博『教室記』1943年(『斎藤喜博全集1』国土社に所収)全集版 391頁、400頁。

2) 斎藤喜博『可能性に生きる』1966年(『斎藤喜博全集12』国土社に所収)全集版 166-169頁。

「国家より個人が先に立つという発言」を取り消さないならば「教壇から追放すべきだ」と迫られる。真面目で誠実な同僚までが、「国賊だ」と非難し、校長に従った。

校長は「教師の権威をもって児童を鍛錬し形成することが教育だ。それが日本主義の教育だ」と、繰り返し説いた。県視学が「この学校の教育は自由教育だ。いまは人も物も徴用できる時代だ。あんななまぬるいことをやっているは駄目だ」と訓示した。実際には、「錬成」の名のもとに、教師が地道な教科指導の努力を怠り、校外での行事が盛んに行われ、子どもの学習が妨げられた。「出征兵士の武運長久を祈る神社詣りなども流行のように盛んになり、子どもたちも毎夜のように集っては神社詣りをするのが流行しだした。そういう子どもたちは翌日は学校で居眠りをしたりしていた」。

国家による教育への統制が強まり、安直な「錬成」に便乗する風潮が高まる時代においても、斎藤は、教室で、日々、眼前の子どもに対して、事実をとらえ、学ぶ力を引き出す実践に専心した。³⁾ 1938（昭和13）年度に担任した5年男女組（男23、女31 計56名）は、指導の難しい学級であった。新学期に初めて教室へ入った時の印象は「生気のないうろたひのないみすぼらしい子どもたちが、ドロンとした眼を向けて私を仰ぎ見ている。何の感動も、何の感激も、興味も喜びも期待も持っていないような顔である。」というものだった。まず、子どもが各自、教科書を独力で読んで問題を見つける力をつけようとした。

第一時の修身のときめいめいに読みをしらべさせる。質問に来る児童少なし。気力がないから、勉強しよう、力強くしらべようとする心が少しもないから、わからない字も見つからず、またしらべようもしないのである。ここにこの学級の第一の欠陥があるのであるから、それを矯正しなくてはならない。それをきょうは強く意識させなくてはならぬと思い、先ず質問にこない者のうちとくにぼんやりしている子どもを指名して読ませてみる。第一番は武井、すでに二行目でつかえてしまう。しばらくそのままにしておく、ずいぶんたってやっと自分で適当に考えて読む、皇運を皇道と読んだのである。そこで訂正してやる。こんなふうにしてどの子どもちがう。つぎに今度は問題の子ども、鈴木次郎および三重さえ子に読ませてみる。いずれも読もうとしない。鈴木はぜんぜん読もうとしない。この子は今まで何を指名してもぜんぜんやらなくて困った子どもである。さえ子は声が小さい

ので驚く、大きい声を出せと気短にいう。鈴木に対して強くいう。鈴木泣き出す。ふたりとも一時間かかっても読まない。三重は幾度か読み出すがどうしても声が小さいのである。

きちんと読まない子を叱責し、泣かせてしまう。斎藤自身の短気と拙劣さを悔いる。

つぎの時間までかかってようやく読ませてから、休み時間気短な失敗をしたと後悔する。拙劣ないけない方法をとったと後悔する。叱らずに他の方面から、子どもが自然に本を読み、大きい声で読むように、さらに自分から進んで手をあげるように仕向ければならないのに、その努力をしないで、そういう根気のある仕事をしないで、そしてその結果を気長に待たないで、気短に子どもをせめ、子どもを叱責した自分はあくまでせめられなければならない。あくまでもみずからをせめなければならない、などいろいろ考える。

一方で、叱ったことに意義も見出す。学級を子どもたちがお互いを高め合う集団とするきっかけをつくった点に、手ごたえを感じる。

ただしこれがぜんぜん失敗であり無意味であったというのではない。必ず何らかの価値はある。何らかの精神を学級全体に与え、子どもひとりひとりを育てている。けれども子どもを泣かせたということにおいて、下の下の教育なのである。結果をあせりすぎ、自分の気長の努力を怠ったということにおいて、下の下の教育なのである。

きょうふたりの子どもが困っているとき、もっと張りのある、生きている、そしてもっと生活を持っている、結ばれている学級であれば、必ずふたりを援助する。励まして読ませるようにする。またふたりも努力して読もうとしたにちがいない。ところがこの学級ではきょう全員が冷然としていた。一言もことばが出ない、何の励ましのことばも出ない。これらのことについても学級全体によく話す。ふたりの子どもにも学級全体にもうなずくまでよく話してやる。こんなことを話せたこともきょうの失敗になかの幾らかの収穫であった。

叱った後は、気分転換をした。「第四時は一時間ゆかに庭でボール取りをさせる。学級の気分がすっかりよくなる」。

新しい学年となって20日経った4月25日、「子どもにうるおいがない、子どもに笑いがなく、子どもが先生に親しまない」状態であった。斎藤は「もっと純粋な子どもにしたい、先生を求め、先生に親しむ子どもにしたい」と、学級を集団として組織する指導に力を入

3) 斎藤喜博『教室記』1943年（『斎藤喜博全集1』国土社に所収）全集版 296頁、310-311頁、319-320頁。

れた。教室で生じる問題に対して、原因を一人の子どものせいとせず、広い視野でとらえることに努めた。

放課後普通掃除のとき、教室の男生が大げんかをする。田口啓二が大ぜいの子をなぐり、棒や机のふたをふりまわして皆を追うので、こわくて仕方がないという報告がきたのである。行ってみると、田口は「家へ帰る」といって鞆を持って玄関で泣いている。田口はそのままにして他生8名に聞いてみる。鈴木、武藤、加藤、庄七、益男、町田、貫井らである。田口が何もしないので皆が「お掃除をしろ」といったらおこったというのである。どちらが悪いかははっきりしないが、おそらく全員で田口を馬鹿にしたのではないと思われる。田口をめぐる集団の気分が悪いところがあるにちがいない。しばらく田口はそのままにしてようすを見ることとする。他生とか学級とか田口の家とくに原因があるとすれば、そちらをなおせば自然に田口はよくなるのである。したがって直接田口を叱り、もしくは「田口は狂暴である」などとレッテルをはってはならないと深く自省する。(5月24日)

子どものよさを認めて伸ばす指導が積み重なり、学年末には、学級集団の質が高まった。

斎藤は、己の主観に縛られずに、子どもの「あるがまま」の姿をとらえるよう、自戒をこめて説く。⁴⁾

先生という仕事は、人間としてどんなによくても、子どもをみる眼のない人では駄目である。子どもの社会のみぬけない人では駄目である。けれど子どもをみるということはむずかしいことである。子どもをみるにはできるだけあたたかい眼と、大きな心で素直にみなければならぬ。己の主観を持って行って子どもをみれば絶対にいけない。あるがままの子どもの姿を客観的に、多面的にみないと正当の子どもの姿をみることはできない。

主観とか先入観とかを持たないで、己れをむなしうして、むしろ子どもの側に自分をおき、子どもから学びとろうという態度でないと、あるがままの正しい子どもの姿はみることができない。子どもの行動の現われは、その子個人として単独に起こることより、その子の生活している周囲の状況、周囲との関係によって起こることのほうが多いのであるから、そういう横の関係とか、それ以前からの縦の関係とかをもよくよく観察して、その個人とか、そのできごとだけから、その行動を判断しないようにする態度も必要である。

斎藤の子どもに対する見方や姿勢は、新任教師たちにも伝わった。記録を書いて、日々の教室でのできごとの意味をさぐり、子どもの事実を見る目を育んだ。教師としてのあり方や子どもとのかかわり方を省みた。

3. 学習指導の充実—永井多知子

1940(昭和15)年4月、師範学校を卒業して教職に就いた、初任教師、永井多知子は、5年女子組を担当する。実践を記録して、自分の指導を振り返り、子どもへのまなごしを豊かにする。さらに、遅れがちな子も授業に参加できるように、学習指導を工夫した。(永井多知子「読方学習の指導記録」のうち「『雨の養老』の学習記録(昭和15年11月)」『草原』第5号 昭和16年1月号、永井多知子「最初の子どもたち」のうち「子どもの心」『草原』第9号 昭和17年5月号)

永井は、子どものけんかについて、事情をよく確かめて対応した。ある日の第三時、書方の時間も終えようとする頃、永井の前へ誰かがぬっと立った。見れば、小林という子である。「先生ふさちゃんね、おめえの父ちゃんは、今頃もぐら掘りしていると、あしの悪口を言ったんだよ」と訴えた。「じつと私の顔をみつめているこの子の眼は、私の答えを待っているようだった。小林の両手は、しっかり握られて、少しふるえていた」。気持ちの高ぶっている小林を前に、「いつもお友だちと喧嘩ばかりしている小林が、近頃おとなしくなってきたのであるが、また喧嘩をし始めたのだなと思う」と、これまでの経緯を考慮して対処する。永井は、小林の言い分を鵜呑みにしない。日ごろの様子をふまえて、辛抱強い「ふさちゃん」が悪口を言うに至った、二人の間のいきさつを知ろうとする。

女の子の喧嘩はたいてい口論である。私が知らない間にしてしまったのだ。小林の相手はふさちゃんだという。ふさちゃんはそんな子だったろうか。毎日の行いでも見られるところだが、ふさちゃんは怒りやすい心を抑えつけ、いつも忍耐強いのです。性質としても、決して悪くはない。そんな性の悪い悪口をふさちゃんが言うはずがない。ふさちゃんの相手が、いつも実力のある小林であるだけに、小林の言い分だけを聞いてすぐにふさちゃんを叱るわけにはいかない。

ふさちゃんに小林への悪口を言わせてしまった原因を、永井はさぐる。「何かしらが原因して、あのおとなしいふさちゃんに、暴言を吐かせたのではなからうか。それについて、私は何一つ知ってはいない。ふさちゃんは、小林が何かしない限り悪口を言う子ではないと思われるので、その原因を探してみたいものと思った。」

4) 斎藤喜博『童子抄』1946年(『斎藤喜博全集2』国土社に所収)全集版 199頁。

と、ふさちゃんに心を寄せる。

まず、小林に対して、訴えを受けとめつつ、ふさちゃんが悪口を言ってしまった事情を尋ねる。

「小林さんが何もしないのに、ふさちゃんがそんなことを言ったの」ときくと、小林は「うん」とうなずいた。小林のこの返事からは、さっきのような勢いは見出せなかった。こんな様子では、私にはとても本当のことはわかりそうもない。小林がこの経過を話すらしくも思われないので、「ふさちゃんがそんなことを言ったのは、大へんいけないね、とくに亡くなった、小林さんのお父さんのことなどいくら子どもだからと言っても、悪口言うものではないね、ふさちゃんには、先生からよく話しましょう」と言って、小林を一応席へ戻らせた。

ふさちゃんは、小林が永井の所へ来ている間ずっとこちらを見ていた。「何か心配なのでだろう」と、心の中を察する。放課後、ふさちゃんから話を聞こうとした。日頃からはっきりしない彼女は、なかなか歩こうとしない。訴えるような眼で静かに永井の顔を見上げるばかりだった。何も答えない。ただじっと黙りこくっている。話をしない、ふさちゃんに、話を聞き出す困難を感じる。

休み時間に「先生ボール投げしよう」と何の心配もなく、何のこだわりもなく、何の恐れもなく言う言葉のように、その答えが得られるものと思っていた私にとって、これはまたなんと手ごわい歯も立たないような、沈黙であったか。私はこわがられてしまったのかな、と考えてもみたけれど、別にいつもと変わっていないはずであった。

日ごろの様子から、ふさちゃんの心の動きを推しはかり、話せない理由を思いめぐらす。

いつも無口で、おとなしい、この子は、自分の立場を弁護しようとさえしない。こんな場合の口のきき方さえ知らない。このおとなしい子に暴言を吐かせた。ということは、よくよくのことであったに違いない。小林が何か先にしたのであろうと予想された。それなのに小林が私のところへ来て何か言いつけた。こんな口惜しさも手伝って、意地になって、話そうとしないようにも思われた。この子にはこんな状態であったのだと事細かに話すことができない。また自分はこういう立場にいたのだということが、わかっているながら、話せないのです。

ふさちゃんの思いを受けとめ、事情を無理に語らせず、追い詰めないようにした。

涙をいっぱいたたえた、この子の眼とぶつかったとき、ああもう聞くのはよそう、と思った。胸がいっぱいになっ

てしまったのであろう。叱られていると思ったのかもしれない。苦しめてはいけない。だがこのまま、何もわからないままに過ごすのもどうかと考えた。「ではふさちゃん、今日はもう帰りましょう。もし先生に言いたいことがあったら、明日話してね、何かに書いてきてもいいですよ」と言って、帰らせた。

翌朝、ふさちゃんは「おはようございます」とお辞儀をした。「何の曇りも認められない」顔を見て、永井は、「ほっと安らかな気持ち」になった。ふさちゃんが「先生、書いてきたよ」と、ノートを持ってきた。書かれた内容から、ふさちゃんが小林にノートで頭をぶたれたことを知る。他人を陥れようという心は少しもない。悪口を言ってしまう状況に追い込まれたふさちゃんを叱らずに済んだ。事情を知って、ふさちゃんに暴力を振るった小林を注意できる。ふさちゃんにも「他人の亡くなったお父さんのことなんか、言ってはダメですよ」と諭した。二人がお互いに心を傷つけ合わなかったことを喜ぶ。

子どもを見る目を磨きながら、永井は、一斉教授では授業への参加が困難な子どもも力を出せるように努めた。一人ひとりが自分の問題を追求して集団の学習へと進む学習指導に取り組んだ。他の子どもに暴力を振るい、学習が遅れがちな、ハル子のよさを見つけ、永井は、教師として成長する。

ハル子の言動から、「父はなく母がヒステリック」である、家庭の事情に、心を痛める。

ハル子の眼の色をみるとハル子の気持ちがわかるようになった現在の私ではありますが、また「水がないじゃないか」と朝早くなどなど私の花瓶へ水を入れてくれるようになったハル子と私の関係であるが、ハル子はいまだに私にハル子の家庭について少しも話をしたことがない。いや「母ちゃん」という子どもたちがいつも自然に口にする母親への言葉でさえ私はハル子の口からでるのをきいたこともない。ハル子には家庭の事情があまりに強く働き過ぎているのではないかと思われる。

ハル子は「一徹」で、暴力を振るう。学習は遅れていて平仮名さえ読めない。絵や字が上手だとほめると喜んでかいて、永井に見せに来る。言葉を出さないハル子の眼から、感情を察する。「『この絵は何の絵、この人は何をしているところなの』と軽く尋ねても、私の眼の奥底まで見透かすように、じっと私の眼を見つめているだけで何も言わないのです。そんな時、とく

に青みがかったハル子の眼は凄く輝くのです。」

ハル子が劣等感にとらわれず、何かに打ち込んで、心がおだやかになってほしいと願う。

ハル子は友だちと話をしている時はなかなか威張っているのですが、一言友だちがハル子について何か言ったりすると、実に早く怒るのです。「人を馬鹿だと思って」「畜生め」これがハル子がいつも怒ったときに言う最初の言葉なのです。馬鹿にされたのだ、とすぐに怒るのです。それだけにまた自分は他人より劣っているのだという感情でいっぱいなのだと思うのです。ですからハル子は非常に敏感になっているところもあるのです。ハル子が何か喜びを持って自分のやるべきことをやり遂げてゆくようになってほしいのですが。

すべての子が授業に参加できるよう、学習形態を工夫した。読方「雨の養老」で、独自学習を行う。ハル子が絵を懸命にかく。通常の授業では見られなかった活躍ぶりに、永井は喜ぶ。

今日のようなすはこの子にはなかなか上出来である。何をかくのかしらとしばらくそばに立ってみていた。一番上に山がかかれてある。どうもその姿は富士山のように思われる、富士山をかいたのかもしれない。下の方には道が茶色く塗られている。その道を真っ直ぐ行くと山へ行きあたってしまいそうであぶない。画用紙にその道を歩く二人がかかれていく。たぶん秋野君と河井君のつもりなのであろう。一人が風呂敷まで持っている。

誰にこんな絵を教わったのかな、ハル子は教科書はもちろん読めるはずはないし、別に何かを見ているわけでもない。ただ自分のお帳面を見てはこの絵をかいていたのでしたから。よくこんな場面が想像できたなあと思える。お友だちどうしが話し合っている言葉を聞いていたのかもしれない、またひよっとすると他人の絵を見て自分もかきたくなってまねたのかとも思う。「朝顔に」の勉強がおもしろかったのでハル子さんも発表がしたくなって一生懸命やりだしたのだと思うとうれしさがこみ上げる。

この学習においての私の第一のよきこびは何と言ってもハル子がかけてくれたことでした。絵をとて上手にかいてくれたことでした。この時に劣生という観念はなくなっているのです。「小黒板にかかれてあるこの絵をハル子さんがかいたん」と、級の誰もかれもが驚きの眼をみはったのです。「ハル子さんは上手だね」と誰もかれも讃辞をおくったのです。このときの児童の心はあたかな友情となってハル子の心に迫っていくのです。誰でもがハル子の価値を認めたのです。ハル子は皆にほめられて顔をほころばせてよろこんでいる。いつも腕力を振りわがままをはたらいていたハル子とは異なっている。一段と良いものを持ってきた。毎日毎日勉強のこと

といえば何一つわかることもなく、学習のよろこびを味わうこともなく過ごしてきたこの子が大きなよろこびを胸いっぱいにくらませて良い子になろうと努めている姿は実に尊い。一列に並べられている絵をみて限りない自信がハル子の心に生まれてきたことと思う。

永井は、教職に就いて1年目から、子どもの成長する芽を見つけて伸ばした。年度当初の苦い「失敗」が、永井の子どもへの見方、対し方を変える契機となった。

書方の時間に、マキ子のそばに立ち、「マキちゃん、も少し姿勢をよくしてかいてごらん」と言った。すると、マキ子の手がちょっと止まり、じっと永井を見上げた。永井はその時に、マキ子の「悲しそうな怨むような眼」をみた。「おや」「どうしたのだろう」と、はっとさせられた。マキ子の身体を改めて見つめた。身体が悪く、筆を持つ手さえ自由にならない。曲げれば折れてしまいうような掌でしっかりと筆を握りしめていたのだ。

「前もってマキ子の身体について私が知らなかったためにマキ子を悲しませてしまった」「知らなかったとは言いながら私の不注意のために、一人の淋しい子をなお淋しがらせてしまったのだと思うと、居ても立ってもいられないような後悔の念が強くなった」と、永井は、自らの言動を戒める。

マキ子のことで「ただ一つのことがらではあるがすべてに細かな注意が必要なのだとつくづく考えさせられた」永井は、「私は学級の一人一人の子どもを知らなくてはならない、そしてその子に対する私の考えを私の態度をそして私の指導を、しっかりと定めなくてはいけない」と決意した。日々の実践の中で、子どもを見る目を豊かにしていった。

4. 子どもへのいつくしみ—木島まさ

1941（昭和16）年度から教職についた、木島まさも、子どもの「問題」を広い視野でとらえ、伸びる可能性を見つけ、よさを引き出した。初任で3年生を担任し、「あばれん坊だと印をつけてもらった子ども、トシちゃん」と出会う。木島のいつくしみのこもった、まなざしとかかわりによって、トシちゃんは、友だちができ、学習にも取り組むようになった。（木島まさ「子どもと帰る」のうち「トシちゃん」『草原』第10号・終刊号昭和18年1月号）

4月4日、「トシちゃん」と、初めて対面する。身なりは粗末でも、子どもらしさ、笑顔の明るさを感じ、好印象を抱く。

トシちゃんの名前を呼ぶ。「ハイ」と手をあげる。そのあがった方を見るとにこにこわらっていた。ポロの洋服を着ている。前のボタンはひとつもかかっておらぬ。その前の開いたところからよごれた下衣がのぞいている。子どもだもの一。よごれた服装など気かけないようだ。にこにこ深いえくぼを作って手をあげたのだ。先生一年生の私にトシちゃんは晴れやかな気分で接してくれた。

4月10日、最初の体操の時間、他の子たちはきちんと整列していたのに、トシちゃんだけが列に並ばずに肋木に登っていた。「上衣を脱いで袖のとれかかったシャツになって肋木を上下している様は私には手ごわいように思われる」と、指導の困難を予想する。学級の他の子どもたちとトシちゃんとの関係についてまで、考察の範囲を広げる。「並んでいる子どもも誰かこのトシちゃんの活躍をやめさせて列の中へ入れてやれないのか……。トシちゃんはそののをきかない子どもでもあるかもしれないなどと放課になって考えた。」

トシちゃんがおとなしい子に暴力を振るう。「十分ほど過ぎてボールをはじめた時にトシちゃんは列より飛び出してこぶしをにぎってAちゃんを打っている。(Aちゃんは何もできないおとなしい子) やめさせてトシちゃんの顔をみれば赤い顔である。ずいぶん興奮したことなんだろう。前の十五分ほどはとても一生懸命だったのに……。」トシちゃんの心の変化をとらえている。

4月11日、トシちゃんに叩かれたAちゃんが休む。Aちゃんの母親が教室の戸を開けた。

「おはようございます。先生!!トシちゃんって子を出してくださいよ。まあひどい子だそうですね」と額に汗をかくばかりに青筋をはっていた。級中しーんとしてしまう。何と理解のないお母さんなんだろう。トシちゃんを出させてどうする気だったんだろう。

私は入口をしめてお母さんと話をした。Aちゃんは昨日の体操でトシちゃんに打たれて今日は学校へ来るのがいやなんですって。お母さんの話をうかがってトシちゃんには私からよくよく注意しておきますと告げてきりをつける。戸を開けて教室へ入る。トシちゃんの目!!当惑そうなおとなしい目の前には私何も言えなくなりました。授業を始めてからも私をいつまでも見守っていた。今日はとてもおとなしかった。

トシちゃんをAちゃんの母親から守った。

トシちゃんは休み時間に外に出るのが一番遅い。遊ぶ仲間がいないからである。木島は、トシちゃんのさびしさを察し、心を寄せる。「外へ出て遊ぶ友だちはひとりもいないとってよいくらい孤独的である。ただキョロキョロあたりを見回している。緒の切れた下駄をひきずりながら革帯をぶらぶらさせているさまはかわいそうでしかたない。トシちゃんと遊んでやりたいと思う。」

教室では、周りの子の本をひっくり返すなど学習の邪魔をするので、トシちゃんと並ぶ子はいない。会礼の時にも、トシちゃんは、まわりの子に手を出したり、おしゃべりをして、校長に注意される。休み時間にトシちゃんをつかまえて、木島が話す。

「トシちゃんちょっとここへ来てごらん」私の前へ来てきちんと気をつけをしている。「トシちゃんはどうしてお行儀よくできないの。今はたいへんお行儀がいいけれど」少し語気が強かったのかもしれない。トシちゃんは元氣なく下を向いてしまった。私は急にかわいそうになって「トシちゃんの仲の良い子誰?」と尋ねる。頭を下げていると上げようとはしない。答えようともしない。「さあ頭を上げてくださいよ」と頭を持って覗き込むようにして上げさせた。にっこり笑っている。「いないんだよ」と言う。

「トシちゃんが乱暴しないでいるとみんなが遊んでくれるよ」とこういったら「うん」とほっくりした。「会礼のときでも体操のときでも並ぶ時は人の体にさわらないんね」と注意して外へ出す。あんなに神妙に私の言うこと聞いたけれど守れるのかしら……。と思いました。

整列の時また並ばない。木島に「おやお話を忘れましたね」と言われて、トシちゃんは「ああ」と頭をなでなで整列する。「反発的ではないトシちゃんだ」と、木島は、トシちゃんの素直さを認める。

5月10日、トシちゃんが、木島に対して反抗的な態度をとった。

第一時、八岐のおろちののところを斉読し始めた時である。けさ登校した時からトシちゃんはいつもよりいっそう落着きがなかった。南側の一番前にひとりでいて手わるさばかりしている。斉読が始まってから腰掛けの上に立ったりすくんだりし、うるさい音を立てている。あまり騒々しいのでそばへ行って「だめね」と一口言った。だが聞こえないのか、何の反応もない。さっきにまして騒がしい音がする。一斉に読んでいる子どもにも影響する。「トシちゃんわからないの」これを確かにトシちゃんは耳に聞き入れたのだ。ぐっと私に反抗の目を見せた。「あら!!トシちゃんがあんな」と思った。「机があるとい

じるのね。机を離しましょうね」と、腰掛けより机を二メートル近くも離してしまっただ。トシちゃんはぐっと立って机を引きずって腰掛ける。私はどうしてよいかわからなくなってしまった。「どうしたん、トシちゃん」などめるように言った。ひっとなってるトシちゃんは何も聞き入れないらしい。

木島は、トシちゃんに家へ帰るように、強く言う。トシちゃんは帰り支度を始める。

斉読も終わった。トシちゃんに強く当たってみようと思を決めて「トシちゃんお帰りのしたくをして帰りなさい。先生の言うことが聞けないんだからお家へ帰ってお家のお仕事をするほうがよっぽどいいよ」「さあお帰り」語気強く言った。トシちゃんは本をしまってお帰りの支度を始めた。読みの終わった子どもらはただぼんやりと私とトシちゃんを見ている。「どうしたん」とささやく声が耳に入った。トシちゃんが鞆を廊下にとりに行くのを幸枝が「トシちゃんよしよ」と言ったけどトシちゃんには聞こえないらしい。

トシちゃんが帰るのを止める子もいた。木島は、教室の外でトシちゃんから話をきこうと考えた。

トシちゃんがせっせとお帰りのしたくをしている間に私はいろいろと考えをめぐらした。したくができあがったらトシちゃんと一緒に外へ出てトシちゃんによく今日の話を話してもらおうと決めた。トシちゃんと私とふたりきりになったらいろいろのことを話してくれると思われる。

学級の子どもたちが、トシちゃんを教室から外に出さないようにした。トシちゃんは自分の席に戻り、授業が再び続けられた。

斉読からトシちゃんに対してだいたい沈黙していた子どもら。トシちゃんが私に叱られているのを見て見ないふりをしている子どもら……。トシちゃんがすっかりお帰りのしたくをして席を立った時、私は椅子に腰掛けているのであった。級の子どもはみな声を揃えて発した。「トシちゃんよしよ」「ひどい目にあうよ今日帰れば」と言う。出口をおさえていてトシちゃんの出られないようにしている関口さん、トシちゃんの体をおさえて席に戻らせようとする女の子。しばらくは級のそれらの子どもたちに反抗していたがふと自分の席に落ち着いてしまった。出口をおさえた関口さんたちも自分の場所に戻った。トシちゃんはお勉強のしたくをしている。「さあお勉強を続けましょう」と授業に移る。この時級の子どもの心に動かされたトシちゃんとトシちゃんを動かした級の子どもをうまく賞讃してやりたかったがまずい賞讃に終わった。

放課後、木島は、トシちゃんの話聞く。朝、家で弟とけんかし、母親に大声で叱られたので、教室で落ち着かなかったことを知る。

トシちゃん残ってこんなことを話す。お掃除の人より遅く帰る。けさ弟と喧嘩してお母さんに追われて学校へ来た。「今日帰ってきてからだぞ。おぼえてろ」とお母さんは言ったのだそうだ。弟の喧嘩とはどんなことかと尋ねると、つまらない小事である。それなのにお母さんはそんな凄い言葉を出さなければならぬのでしょうか。お母さんに「おぼえてろ」と言われてトシちゃんは学校へやって来たのである。落ち着かないのにも意味があったのである。それを騒がしいと私に叱られ「お家へ帰れ」と言われる。「先生までくやしくなった」と言う。「だけど級のみんなに止められたのでやめた」と言う。トシちゃんはきれぎれに始終を話しているうちにいつもの笑顔になっている。

木島は、トシちゃんに、学級の友だちのありがたさを感じ取るよう、諭した。さらに、家で、母親に謝り、弟の面倒をみるように、助言した。

お掃除を終えて机が並べられた時には私は知らずトシちゃんと並んで腰かけていた。「お友だちってありがたいだろう。そういうことわかるトシちゃん」「うん」「弟は俺が一桑原ぬけてもまだ泣いていたんよ」と話は朝に戻る。「俺はうんとぶつくらしたんだからな、俺のはく下駄はいて遊んでるんだもの」と。「今日は家へ帰ったらお母さんに言われないうちに悪かったことよくわかったとあやまってごらん。きっとよろこんで許してくださるよ。そして弟の面倒をよく見るんだね」と言う。にこやかに受け入れるトシちゃんである。気も晴れ晴れした様で帰っていく。さよならの声も明朗に。

木島は、一日を振り返り、「ああ今日トシちゃんをかわいそうな目にあわせた。子どもを見る目のできていない私が簡単に叱ってしまったんだもの。以後注意することにしよう。」と、自分の対応のまずさを省みる。家で嫌な思いをした上に学校でも叱られたトシちゃんの心を察する。「私はトシちゃんを叱る気になれない。散漫な時などはカッとなることもあるがすぐに聞き入れるのでカッとなった自分の心が恥ずかしくなる。」と、自戒する。

ある日の休み時間、トシちゃんが男の子たちの野球を「体をゆすって見入っている」。不意に「先生俺もまざりたいなあ」と言う。一緒に見ていた木島は、トシちゃんの心の中を察し、「まざりたいけれどどうせまぜてはくれないのだろうと考えていることと想像した」。

トシちゃんを仲間に入れるよう、子どもたちに促した。野球の仲間に加えてもらったトシちゃんは、「球は決して逃がさない主義」で、裸足になって守備をした。味方の子が「トシちゃんに守ってもらうとこたえられないなあ」と感心する。トシちゃんは笑顔を絶やさないう。野球で活躍するようになると、授業も「はきはきと受ける態度」ができた。

授業に集中できるようになったトシちゃんの学習について、木島は、よい点と悪い点を細かくとらえた。「算数は割合よくできるが注意散漫なために新教材など覚えきらぬことが往々ある。」「綴方は非常に悪い。あきてしまうらしい。二三行書いて捨ててしまう。五月農繁休業直前に1頁と3行自由題で書いたけれどトシちゃんにしてはよく根気の続いたほうと考える。」「国語の読みは非常によい。指名された時はことさらに胸を張って姿勢を正して読むのである。」

6月の農繁休業の間には、トシちゃんが自分から日記を書いてきた。トシちゃんの日記を見て、他の子どもたちも日記を書き始めた。

6月に入ると、トシちゃんは家の農作業を手伝うために休みがちになった。欠席する時には、近所の子に「6月19日(木)先生おれは今日リヤカーで麦をはこぶからいそがしいからやすみます」と手紙を頼んだ。木島もうれしくて「トシちゃんのはたらくすがたが先生に見えるような気がします。しっかりはたらいてくださいね。」と返事を出す。

6月23日、勤労奉仕の害虫駆除に出かけた際、リヤカーをひいてよく働く子が、遠くに見えた。木島が「ああこちらのほうの子はずいぶん働くんだ」と感心すると、トシちゃんだった。教室でも掃除をせっせとする。

トシちゃんは、木島にほめられるたびに、そのうれしさを、日記に書き表わした。

7月8日(火曜日) 天気 晴 31度 1時間目に先生にほめられました。「トシちゃんいい子ね」と言いました。おれはとてもうれしいです。二時間目国語はとてもおもしろくべんきょうした。

7月9日(水曜日) 天気 晴 32度 今日算数がおもしろかった。私は先生にほめられました。朝先生が図書室へおれをつれていきました。わたしは何だろうと思っていました。「この頃トシちゃんはとてもいい子になりましたね」と言っておらのかおをうんとよく見ました。

7月のある日、校庭の泥水で汚してしまった服を洗濯

してもらうので裸になっていた女の子に、トシちゃんは、自分の新品のシャツを着せた。学級の子どもたちが感心した。14日には、念願の二人並びとなった。よろこびを、日記に表現した。

わたくしは今朝恒夫ちゃんと二人で先生に呼ばれました。何だろうと思ったらおれと恒夫ちゃんと並ばせるといいました。「だけど守ることは恒夫ちゃんのいい所をまねしなさい」と言いました。おれはとてもうれしい。みんなが「トシちゃんいいなあ! 恒夫ちゃんと並べるんかー」と言いました。

授業中に騒がしくなるトシちゃんに、恒夫ちゃんが「トシちゃんよせよ」と言うと、すぐ止める。

2学期になると、会礼の時に自分の位置にきちんとつけるようになった。友だちもたくさんできた。算数を喜んで学習し、テストをすると成績がよい。「トシちゃんごらん、こんなによくできていますよ」と言って返すと、教室に残って勉強する。「おら、先生に算数を見てもらうんだい」と皆にやたらと話して、うれしがる。勉強の合間にトシちゃんと話をすると、母親が忙しくて面倒を見てもらえないことがわかる。木島が洋服の繕いをする。

11月28日の記録に、木島は、トシちゃんが「だいぶよい子」と思えると書いている。「私が何か言う『ハイ ハイ』と言う。授業中もにこやかにこちらを向くかわいらしい。少しお行儀の悪い時トシちゃんを見るときりつと改めて私の顔を見る。次に安心して笑顔になる。気柄のいい子と思う。」

トシちゃんは学習に懸命に取り組むようになった。筆算の線を、トシちゃんが「じつにきれいに」書いた。「中でもきれいに一所懸命に書いたのはトシちゃんです」と、木島が名前をあげてほめた。「え・・・」「ほう」と級の子たちはトシちゃんに目をやった。トシちゃんはえくぼをつくって胸を張り昂然として木島を見ている。ほめられると、「今日はまた算数見てもらうんだい」と、自分から、放課後残って学習しようと張り切る。早く学習ができるよう、掃除の手伝いもする。

「あばれん坊」と見られていたトシちゃんが、木島のいつくしみによって、内に蔵されていたよさが発揮されるよう、育まれた。

5. 教育の理想と現実のはざまで一片山保男

片山は、1942（昭和17）年1月から、出征した教師に代わって5年生男子組担任となり、子どもと接する。教育への理想と現実の子どもとのかかわりのはざまで悩む様子が記されている。（片山保男「初教壇」『草原』第9号 昭和17年5月号、片山保男「教壇一年の回顧」『草原』第10号・終刊号 昭和18年1月号）

「先生と言えば、何か型にうずまったようなことばかりを言い、子どもがふざけっこをしていても止めさせられ、早く並ばないとっては叱られる。」という印象を、片山は持っていた。理想として「型から離れて、何かしらひろびろとした天地を求めるような心で、自然と型破りのなもの」を求めた。「澁刺たる独創的な教育道を歩んでいくつもりだった」。

しかし「実際に踏み込んでみると、そう簡単に理想的な道が開けてくるはずがない。問題は際限なくあった。」「いったい、私には、どういう子どもがよいのか、根本的なそのことがわからなくなった。」「今まで素人考えに考えていた教育観は、学校という型のなかに、しっくりと入りきれないものもあった。」と、現実の子どもへの対応に戸惑う。

子どもを叱ったものの、反抗的にしてしまうのではないかと悩む。

ある雪の降る日に、二階の窓から小さな紙片を放ったのを見た。そして「いけない」と言った厳格教育がよいとはいえ、それを拾いにやることは少しどうかとも思ったが、「拾っておいで」と命じた。

言われた貫木は、その小さな紙切れを拾いに行くばかりさしに、意外そうな顔で私を見た。はじめはうそだと思ったらしかったが、うそでないことを知ると、何とも言われぬ姿で階段のほうへ歩いていった。その時の貫木の顔は今でも眼にある。

フト、私はかえって反抗的な心をつくりはしないかと思った。また、自分のなかにあった「かわいそうと思う心」に負けてしまった。もう、拾いにいこうとして、階段のところまでいったのだから、後悔はしているに違いない。許してやったら、かえってありがたいだろうと思った。「貫木、・・・よろしい・・・」と呼びとめた。ふたたび意外な言葉に、私の顔を見ていたが、やがて解放されたよううれしそうな表情で戻ってきた。

取りにやらせるべきであったか、ゆるしてやってよかったか、私にはいまだにわからない。

片山のあいまいな態度を批判した子どもをほめて、

後悔する経験もした。

読本で「雪の山」を習ったとき、ちょうど庭にあった雪を問題にし、「あれがいつまであるか」と聞いた。

子どもたちは思い思いの日を言い、それを大別して黒板に書いておいた。幾日か前にも、シンガポール陥落の日を僥倖に私が言い当てたことがあるので、今日も子どもたちは「先生は幾日までであると思う」と口々に聞いてくる。私は少し考えて、「十九日だと思う」と言った。

二時間ばかり経ってみたとき、これはいけないと思った。十九日まで持ちそうもない。さえぎるものもない陽光に、雪は心細い姿になっていった。「先生は十八日にしようかな」と、卑怯なことを言ってしまった。子どもたちは不満そうに私を見つめた。

このとき、大沢が決心したように勇敢に立ち上がった。「先生はそういうのはいけないんだ。態度がはっきりしないんだ。」先ほど、清少納言のキッパリした態度をほめたばかりである。私は失敗したと思った。仕方ないのでそう言ってくれた大沢の勇敢な態度を大いにほめた。

それから、三月に入ったある休み時間、運動場で子どもたちと鬼ごっこをしていた。にぎやかに遊んでいたので、始業の鐘をききそこねてしまった。「先生、もう始まったのだよ」と言う子どもの声にハッとした。他級の生徒が大勢遊んでいると思ったのは、体操をする級であったのだ。いそいで教室へ入っていくと驚いた。「先生は鐘が鳴ってもすぐに入って来なかった。おれたちはとっくから入っていたんだ」と先に入っていた子どもたちが、昂然として言った。実は昨日、「鐘がなったらすぐに入りなさい」と言いさせたばかりなのである。

それにしても、今日のこのありさまは何事だろう。口をとがらせて先生に言い下る態度は実にいけない。私は情けなかった。何がそうさせたのか、すぐに思い当たるものがある。それは、明らかに、「雪の山」の時、「先生はいけないんだ」と勇敢に言った大沢の態度をほめたことにあるのである。その結果（何でも自分が正しければ、先生を攻撃しようとするよきものである）というような考えを彼らに抱かせてしまったのだ。今日も、なかには（先生を攻撃すれば、ほめられるかもしれない）という頭の者もいるように私には感じられた。少なくとも（叱られるようなことはない）という心が、無意識にせよ彼らの中にはあるのである。

常々、叱り方やほめ方については、悩んできた私であるが、この時は痛切に考えざるを得なかった。また、自分の言行に対しても、些細な注意をはらわなければならないとの感を深くした。薄氷を踏むような心構えこそ、教育者が子どもに接する態度でなければならぬと思った。

教師となって2ヶ月を経た、3月10日の記録に、片山の悩みが綴られている。

子どもたちをできるだけ叱らないようにしていても、かなり口喧しくなってしまう。厳しくしてしっかり躰けてゆこうとすれば、まるでカミナリのようにしてゆかなければならない。ガラスは壊す、植木鉢は割る、本は忘れてくる、物は失くす、まったく手がつけられない。

うんと厳格にしようとする時々考えてみるのだが、いつもそういう時に私の頭にくるものは次のようなことだ。学校で厳格に躰けられていると、卒業すると同時に、急にのびのびとしてしまつて羽をのばし始める。学校の厳格度が強ければ強いほど、反動的に不良な仲間に入ってゆく者があるということである。

ある厳しく躰けられた卒業生の口から「私の級からは不良が多く出た」ということを聞いた時には、まったく学校の厳格教育の効果を疑い、情けなくなった。しかもそれは、真面目だと信じていた卒業生の言葉なのであるから、私の悲観の度も強かった。

しかし、反面私の心は“教育はどうしても厳格でなければならぬ”と、強く叫んでいる。生命をかけたほどの苦しみの中からこそ、真珠のような光が生まれてくるのではないだろうか。

結局、問題は厳格か否かではないのだ、か弱い子どもたちに、時間が制約された学校で、彼らの心を引きつけながら厳格にしてゆくには、いかにしたらよいか、その方法にあるのである。

叱り方についての悩みを記した2日後の3月12日の放課後の出来事である。10名くらいの子どもが、学芸会の練習をしようと、学校裏の田圃に出かけた。片山も、後から、写生をしに行つた。兵隊ごっこをしていた。子どもたちの姿は「実に実にたのしそうであった」。そのうち、高く積んだ藁束の上に登り始めた。

西淵は、ただ一人てっぺんに登り、得々として跨つた。「西淵、藁は抜けないか」「抜けません」と、向こう側から撃っているものの声、抜けないはずはないと思つたが、高いところを征服しようと、一心に攀じている子どもを見ると、やめさせる気にはなれなかった。お百姓さんには気の毒だけれど、少し犠牲になってもらおうと思つて眺めていた。

とうとう数名跨つた。雲一つない三月の空である。私は、「どこかに雲があるか」と聞いた。

こうして楽しく遊んで、やがて帰りがけになつた時、みんなが攀じ登つた北の側へ行つてみた。そこには予想通り、かなり抜け落ちた藁があった。抜けることは知りながら、登りたい一心で、軽い気持ちで答えたのであろうが、その態度がいけないと思つた。

思う存分遊ばせたのちである。「さっき藁が抜けないと言つたのは誰だ」と鋭く追及した。みんな意外なお目玉に驚いていたが、私はかまわず強く叱つてやつたのだった。

せっかくの楽しい遊びも、これで目茶目茶になつてしまったようで、なんだか淋しい気持ちがしてきた。

子どもたちが楽しく遊んだ後に叱つてしまい、気まぐずい思いをする。数日後の3月16日、子どもの意外なよさに気づく経験もした。風邪をひいて高熱が出たため、2日間学校を休んで家で寝ていた。すると、休み時間ごとに子どもが見舞いに来る。

みんな、来る時も帰る時も「今日は」「さようなら」または「お大事に」などと言って帰るようになった。隣のおばさんがあとで遊びに来て、「子どもはかわいいですね、裏のほうで『先生が病気だと心配でしょうがない』と言いながら行きましたよ」と、話してくれた。言つたのは山田昇らしいが、よく喧嘩する彼に、こんな半面があるのか、と驚かされた。

いつも教壇からばかり見ていないで、たまにはこうした角度から子どもたちを眺めることが、いかに大切であるかということをしみじみと感じた。彼らはどこまでも純真である。私の前に来ては、大人じみた見舞言葉は言わないが、何気なく友達と話す言葉に真実が語られている。

年度が変わつて、新しい5年生を担任しても、叱り方について悩む。「4月28日（火）劣生を叱つたことが悔いられるのは、叱るときの自分の心構えができていないからだ。」

あとで後悔しなければならない叱り方をしているなんて、自分は深い罪悪を犯しているのである。頑是ない子どもが、先生に叱られたときのくしみ、勉強ができないあの子は、きっと自分でもなぜ私はできないのか、どうすればできるようになるのか、幼い胸でなやんでいるのではないだろうか、私の叱り方が、少しもあの子どもを向上させずに、ただ、いたずらにくるしみを与えているのだとしたら、さなぎだに苦しみの多い人生に、さらに地獄を子どもの生活の中へこしらえてやっているようなものである。

人生を、明るく、たのしく、正しくしてゆくための教育であるはずなのに、一歩譲れば、正直な子どもを不正直にし、明るくはずの子どもを暗くしてしまうのである。

12月23日に、一年近くの教師生活を振り返り、子どもへのかかわりを反省した。

私は自分の心を偽つて、無理にきびしく叱つたようなこともあつた。そして、それが教育的な態度であるかのように考えたこともあつた。けれども、そういった作為的な態度は、だんだんと子どもの心を縮めさせるには役立ったかもしれないが、純情な心に喰い込んでいくものは少なかつたようだ。私は、ありのままの心で、子どもに接していくべきであつた。

片山は「子どもと遊ぶことが何より好きである」と、子どもの心に共感できる。

ある体操の時間、斉田へ行く途中の川へ駆け足をして行き、川端の枯草へ子どもを寝転ばせた。あおむけにならせ、広い広い空を眺めさせた。青い空をいつまでも眺めていると、何だか、身も心も大空へ吸い込まれてゆくような気がする。自分の身も心も、大自然の一分身だという感じがしてくる。悠々と流れてゆく雲を見て、少し時間がたったころ、「あの雲は何の形に似ているのか」と聞いた。豊かな想像力を働かせながら、子どもたちは思い思いのことを言う。「魚が泳いでいる」「飛行機だ」「きのこだ、ほら先生あすこが傘で、あすこに柄がついている」等々、一々応ずるにいとまがない。いろいろな雲を見つけ、白いところ、黒っぽいところを見分けて、子どもたちは突飛な想像をしてゆく。幸い風もなく、お百姓一人通らない。こういうことをしているときに、私は一番幸福であった。

子どもと一緒に想像の世界を楽しめる片山だからこそ、子どもへの対応に悩み続けた。

6. 日々の実践を見つめて—新任教師の成長

玉村小学校では、新人教師が自分の毎日の実践を省みて、子どもへのまなざしを豊かにしている。

1941（昭和16）年度から教職に就いた、初任の、設楽幸は、1年生を担任して、子どもの事実を見つめながら成長する。（設楽幸「一年生の横顔」のうち「六月の頃」「遠足」『草原』第10号・終刊号 昭和18年1月号）

ノートの代金を家に取りに行かせた子どもの事情を知って、自分の対応を反省する。

京三はノート代金を四日も忘れて来たので昨日家まで取りにやった子どもである。わがままで乱暴で喧嘩の好きな子どもだが、どこかにくめないかわいさのある子どもである。昨日帰される時、十四センと書いた石盤を持って、とてもいやな顔をしてしぶしぶしていたが、とうとうしまいに出て行った。それっきり来ないでお父さんが鞆を取りに来た。「お金を持たせてやりましたが先生にあげないのでしたら、なくしてしまったのでしょうか。家に来てぐずって学校へ行かないと言うのです。」

お金をなくしたのか、それならあんなに強くいうのではなかった。急に子どもがかわいそうになる。けれどどうして正直に言えないのであろう。

遠足の前日に強く叱ってしまい、遠足に行かずに勉強すると言ってしまったことを気にする。遠足の準備

をしてこない子どものことを思い、弁当を余分に用意する。子どもたちは、叱られたことを忘れて、遠足の支度をしてきたので、安心する。

よいお天気らしい。子どもたちのうれしそうな顔を思いつつ顔を洗う。きのうはどうしたのかさわいでばかりして落ちていてできない授業に腹を立ててしまい、「明日はみんなだけ、遠足に行かないで勉強しましょう。きょうはこんなうさくでは勉強できませんから帰りなさい」と強く叱って帰ってしまったが、きょうはどんな支度でくろう。心配になってお弁当をたくさん結ぶ。

途中で匡夫に会う。ランドセルを背負っている。ドキンとしつつ、「宮下君、遠足へ連れて行くよ。お弁当持っといで」と声かける。「先生、これ、お弁当だよ」ランドセルをゆすって答える言葉に胸なで下ろす。紺のセーラーに赤い帽子の子がはねている。半ズボンに水筒の子が下駄箱に靴を入れている。いつもとちがった服装にワザワザ前へ回らないとわからない。でも叱られたことなど忘れたように、皆遠足の支度に、胸なで下ろす。

高橋ゆきよは、5年生を担任し、年度末に、子どもたちに裏切られた思いをする。掃除の際、半分くらいの子が箒を片付けず、奉安殿の周りに隠しておいたのである。（高橋ゆきよ「観察記」のうち「あるときの子ども」『草原』第10号・終刊号 昭和18年1月号）

子どもに裏切られた悔しさと自分の指導の至らなさが、記録に綴られている。

何だかじっと頭をおさえられたようないやな気持ちでついむかむかとして「かくした人はかくしたところへいつて立っていなさい」と言ってしまった。子どもたちはしぶしぶと出て行った。「今朝の当番の人はかくしたほうきを持っていらっしやい」と言って持ちにやる。

半分くらいの子どもが出た教室は静かだ。でも気持ちがい静かさではなかった。残った子どもたちに「先生はみなさんにそんなことするように今までいっしょにお勉強したり教えたりしてきたのではない」と言ううちに、何かしら今までの子どもに対する自己の指導の至らなさを発見したようにも思えて、もっともっと細かにみてゆかねばと思いつつながらなぜ早く気がつかなかったのだろうか、大いに今までのことについて反省もし今後の指導についてはいっそうの努力をせねばと思った。その一方むらむらした気持ちをおさえかねている自分だった。

あれほど信じていた子どもたち、どの級よりもよい子どもと思ってともにやってきたのに、何と言ってもよいかわからぬものが心のすみから自然にわき出てくる。いろいろのものが涙となって一つ二つと落ちてきた。子どもたちはしんとしていた。

奉安殿のそばに子どもたちを集めて話しながら、高橋自身も教師としての成長を願う。

子どもたちは下を向いたまま目に涙をうかべてきている。私もいつしか声がかすれてきてしまった。子どもたちはわかってくれたのだ。幾人かの子どもたちを残してあの子は教室へ入れた。残った子どもたちに「あなたたちは来年は初等科の上級生ですよ。今までのことを反省してもっともよいお姉さんたちにならなければいけませんね。そして学級のため学校のため一生懸命やりましょう」と言ったその言葉の中には自己に言い聞かせるところもあった。そのような子どもとするにはと。

子どもたちが箒の片付けを怠っていた事実を知ったことは、将来のためにはよかったと、前向きにとらえる。

今までそんなことしなだろろうと信じていた子どもたちがこんなことをしてしまった。それを知ってしまった時の気持ちは何とも言えない嫌な気持ちだった。しかし大半の子どもたちがしていたのだから早いとは言えないが知れたのでよかった。もしそんなことが知れないでいたら一日遅れても自己及び子どもの反省が遅れることになると思うと、遅かったとはいえ知ったことをうれしく思う。

感情が先立った対応を反省し、自分の指導を改善しようとする。子どもを見る目を磨こうと努める。

むかむかした気持ちで子どもに対してあのような態度をとってしまったが、もっとよい方法はなかっただろうか。そんなときの指導の方法も考えられると思った。

子どもたちはもっともっと細かいところまでみつめてゆき温かい心で導いてゆくべきだ。ずいぶん細かいところまで注意してきたはずだと思っていたがまだまだと思った。

事にぶつかったら子どもたちとともにぶつかって進んでゆこう。そしてきょうよりもあした、あしたよりもあさつと、一步一步ときには教えられたり教えたりして失敗を失敗として片づけずよりよいものとして仕上げてゆきたい。

子どもとかかわる事実の中から、よりよい道を求めようとする。

『草原』第10号（終刊号）は、木島まさ、高橋ゆきよ、設楽幸たち、新任の女性教師による記録の特集であった。斎藤喜博は、若い女性教師の実践と記録に感動し、将来の活躍を期待した。

特集した諸氏は、いずれもまだ二十才前後の、しかも女学校出たての若い人たちである。こういう人たちが、こういうすぐれた仕事を坦々とするに、いつものことながら私はただ驚き打たれるばかりである。読者各位はどうかこの事実を軽々に見過ぎないで、そのよってくるところのいづくにあるかをよくよく見極めていただきたい。その実践力と、その心の在り方をよく見極めていただきたい。

記録は愛と実践によってのみ生れる。実践のないところ、愛のないところに、記録は決して生れない。また一方、記録することによって、すぐれた愛と実践はみがかれる。この関係この事実を以上の諸氏はよく理解されたい。

7. おわりに一島小学校の教育へ

斎藤が、1952（昭和27）年度から島小学校長として、「授業の創造」に取り組んだ際に、道を拓いたのは、若い女性教師たちであった。とりわけ、船戸咲子の功績は大きい。公開研究会の翌日に、特別に行った研究授業（3年生まで「力の弱い教師」に担任されたために指導が難しい、4年生に対しての授業）での出来事である。⁵⁾ 子どもたちが教室に入らず、授業で使う印刷物も忘れてきた。船戸は困惑するものの、決して叱らず、笑顔で応じた。船戸の「けなげさ」「教師としての立派さ」に感動した斎藤は、次のように記している。

泉さん（船戸の仮名）は困ってしまった。「もうこんなにお客さん〔何十人もの参観者のこと〕がきているがね」といっても、子どもたちは聞かなかった。「もっと遊びたい」「もっと遊ばせて」といっていた。泉さんは笑顔をつづけたまま、からだをおどけたように動かし、両手を子どもたちの方へさし出した。「たのむからはいっておくれよ」といった。そのことばに子どもたちはようやくだまった。そして参観人の間をくぐりぬけるようにして教室のなかへはいってきた。

泉さんは相変わらず笑顔をつくって授業をはじめた。参観人は教室の後ろにも横にも、前の方にもいっぱいになっていた。渡してあるプリントに子どもたちが書きこんでくるわけだったが、泉さんがそのことを聞くと、「わたし忘れてきちゃった」「おれも持ってくるのを忘れちゃった」とあっちこちからつぎつぎと声が出た。泉さんはその声が出るたびに「しよがないね」と、大きな声を出しながら、びっくりした表情をしてみせた。参観人も子どもたちも笑い出した。

5) 斎藤喜博『授業入門』1960年（『斎藤喜博全集4』国土社に所収）全集版 235-237頁。

今度は、格次君が「鉛筆忘れちゃった」と大声を出す。船戸が鉛筆を貸そうとしても、見向きもせず、紙くずでいっぱいの机の中をごそごとかき回していた。それでも、船戸は、明るい笑顔を見せたまま、格次君に話しかけたり、一人ひとりの子どもに呼びかけた。笑顔を崩さず、ユーモアたっぷりで子どもたちに向かった。そのうち、授業に入ろうとしなかった子どもを、授業の中に引っ張り込んでしまった。子どもたちはだんだんと引きこまれて発言していった。大勢の参観者のことなど子どもたちの意識から消えた。格次君も授業に参加し、問題を解決する重要な契機となる発言をした。授業の終わる時には、学級全体の力で、難しい問題をみんなのものとした。子どもたちはすがすがしい姿勢になり、満足して終えた。

船戸は、教科指導の力で、子どものよさを引き出した。「叱らないで子どもを育てる」教育が、玉村小学校から島小学校へと継承されたのだ。斎藤に勧められて、船戸は、毎日、教室での子どもの姿を記録した。記録をとる前は、叱るだけだった、けんかについても、子どもにとっての意味をつかめるようになった。教室の事実を記し続けて子どもへのまなざしが豊かになったことが、叱らない教育の根底にある。教師が日々の子どもの様子を記録して自らの実践を省察する『草原』誌の姿勢も、『島小研究報告』へと引き継がれた。

(平成26年9月30日受理)

[付記] 本稿は、科学研究費助成事業（基盤研究（C）課題番号25381005）の成果の一部である。